

今後の技術対策について

近年、夏期が高温で推移する傾向にあり、平成11年は記録的高温により広い地域で米の品質低下がみられ、また、平成12年においても前年に引き続き高温となり、水稻生育が大幅に前進するとともに、一部地域で米の品質低下がみられたところである。

需要の動向に即した米の計画的生産が求められる中で、気象変動に対し技術面での確に対応することにより米の作柄の安定と品質の確保を図ることが従来にも増して重要となっており、低温時のみならず、高温時にも対処した水稻の技術対策が求められている。

このため、今後の稲作の技術指導等に当たっては、近年の高温年における生育・品質への影響等を踏まえ、地域の実情に応じて以下の事項に十分留意するとともに、気象・生育状況の迅速かつ的確な把握とこれを踏まえた必要な技術対応が現場段階で的確に実施されるよう、情報伝達体制・指導体制を一層強化する必要がある。

① 品種について

品種については、適地適品種の原則に立って、奨励品種の中から地域の条件に適したものを選定することが基本である。その際、気象災害等の危険分散や繁忙期の労働力競合の回避等の観点から作期の異なる複数品種を組み合わせることが重要である。なお、高温に対する耐性や気温の変化に対する品質変動は品種によって差があるため、今後はこうした高温登熟による品質低下の品種間差を明らかにした上で、その遺伝様式を解明し、耐性品種育成の基礎を固める必要がある。

② 移植時期について

移植時期については、近年、多くの地域で労力確保が容易な5月の連休時に行われる等、総じて早まっている。これが生育初期の茎数過多等の生育過剰を招くとともに、多くの地域で出穂期が7月下旬から8月上旬となることから、その後の登熟期に高温に遭遇しやすくなり、でんぷん蓄積の不良から乳白粒発生等の高温障害の原因となっている場合がある。このため、気象条件、品種、苗の種類に応じた適期移植を徹底するとともに、肥培・水管理による茎数の適正化等の基本技術励行に取り組む必要がある。ただし、その後の気象の推移によっては、適期移植を行ったとしても、登熟初中期に高温となる場合があるので気象の推移及び予報に留意し、適切な栽培管理を行う。

③ 施肥について

高温年においては生育ステージが前進するため、品種の特性、土壌の種類、地力等に即して、気象経過を考慮しつつ、生育診断等に基づき適期適量の施肥を行うことが基本である。特に、乳白粒発生等の高温障害の対策として窒素の追肥を行う場合には、籾数過多を招かないようにする必要がある。一方、近年市場から要求されている、良食味米生産技術の一環として施肥量が抑制される傾向にあるので、適正な施肥時期・量について玄米蛋白含量と食味、外観品質の確保の観点から検討する必要がある。

④ 水管理について

水管理については、出穂期以降の間断かんがいや掛け流しかんがいにより高温・高夜温による稲体の消耗を防ぐことが重要であり、登熟期の気温・日照条件、地区の用水確保等を考慮し通水間隔を決定する必要がある。また、早期落水は乳白粒発生等の高温障害が多発する要因となるので厳に抑止するが、土壌が軟弱である場合については、中干しを含めた田面の硬化並びに暗渠施工等による排水性の抜本的な改善が必要である。

⑤ カメムシ防除について

カメムシは、春先から水稻の出穂期にかけて高温が続く場合に多発する傾向にある。このため、畦畔や休耕田、雑草地での草刈りを出穂期の10日前までに行った上で、発生予察情報に基づき、出穂期及び乳熟期(出穂期の7～10日後)の農薬散布を的確に実施することが必要である。

⑥ 適期収穫について

胴割れ粒の割合は収穫適期後日数を経ると増加する傾向にあるので、品種、登熟状況、登熟期の気象を十分考慮して適期収穫に努める必要がある。特に、高温年の場合には登熟期間が短くなり収穫適期も早まるので、積算気温だけでなく玄米品質等を十分勘案して判断するよう努める。